

いきいき

VOL.21
平成21年6月29日
いわき市総合教育センター

■ 1学期の中間期～期末に向かって!

- 各学校では家庭訪問の成果をもとに、第1学期中間期から学期末に向けての教育活動に励んでおられることと思います。
- 今号からは、児童生徒の姿から見えてくる、いろいろな問題点を挙げ、その改善について考えていきたいと思います。

「自尊感情の薄い子どもへの対処のしかた」

自尊感情とは自己に対する評価感情のことで、自分自身を基本的に価値あるものとする感覚を意味します。これはその人自身が常に意識しているわけではありませんが、その人の言動、意識や態度を基本的に方向づけています。

自尊感情は、最初は親から大切に思われる、かわいがられることで育まれます。自尊感情の希薄な子は、発達段階で「親から大切にされている」という基本的な信頼感が獲得できていないと考えられます。

したがって、まずは丸ごと受け入れてもらう体験が大事。できる限り、その子が本来持っているものを肯定し、存在そのものを認めてあげるような言葉がけをすることです。

思春期になると「足が速いと思っていたけれど、それほどでもない。」など、自分自身の不得意な部分にふと気づき、混乱する子もいます。その場合は、失敗しても落ち込まないような表現を心がけ、人間誰にも長所と短所があり、全部含めて「自分」なのだと伝えます。

また、感情をうまく表に出せずに内向する子と、自分や相手を受け入れられなくて攻撃的な行動に出してしまう子の、大きく2つのタイプに分かれます。まず、どちらのタイプかを見極めが大切です。

前者の場合は、安心して自分を出せるような工夫やソーシャルスキルのトレーニングを、また、後者のタイプは生育歴の情報が大事です。もし成長のプロセスで虐待を受けている可能性があれば、専門機関への相談も考慮することです。

また、日々の中では、その子の存在を丸ごと受け入れる姿勢を貫いてください。それがその子の自尊感情を育てていくはずで。

「対人関係で問題を抱える子どもへの対処のしかた」

対人関係を築けないタイプには、自信がなく、本音が言えない子が多いようです。特に、思春期は「好き・嫌い」「快・不快」をダイレクトに出しながら子ども同士つながっていかうとするものですが、「好き・嫌い」ではなく、「どれが正しい答えか」を考えてしまい、答えがわからないので黙ってじっとしています。

「空気は読めるけれど、答えが出せない。」というタイプの子は、自尊感情が育っていないと考えられます。対処としては、その子が少しでも自分の感情を出したらまず受け入れてあげること。やや過剰でもいいので、「それを選んだんだね。すごいね。」と。それを繰り返すことで徐々に自分を出せるようになり、同級生ともコミュニケーションがとれるようになっていきます。

反対に、自分の感情を出しすぎて人とうまく関係を築けない子は、自律性に問題があると考えられます。自律性とは、自分の感情をコントロールする力で、そのベースは、1～2・3歳の間のトイレット・トレーニングなどを通じて、自分の欲求を適切に表出することと、そして我慢することとを学びます。欲しいものでもちょっと我慢する、ドリルもできるところまで頑張るといったことを、励ましながらか続し、感情のコントロールを育てていくことが大切です。

この場合もできたら必ずほめてあげることです。一つひとつが成功体験になっていくようにサポートすることが大切です。

「いきいき」についてご意見、ご質問があれば総合教育センター松崎までご連絡ください。

